足りぬ人手「少しでも役に」

西日本豪雨　玉野高生奉仕　真備同行ルポ

家屋片付けや土砂撤去

西日本豪雨の被災地を市内の高校生がボランティアとして訪れている。猛暑の中、浸水した家屋を片付けたり土砂を撤去したりと、まだ災害の爪痕の生々しい現場で汗を流している。19日、玉野高野球部の２年生16人が倉敷市真備町地区で取り組んだ作業に同行した。

（岡本遥加）

真備町地区は全域のほぼ3割が水没し、甚大な浸水被害を受けた。地区に入ってバスの窓から見えたのは、干からびてひびの入った田んぼ、ひっくり返った車、泥をかぶった街路樹、道路脇に積み上げられたごみ…。悲惨な光景だった。

午後2時半ごろ、真備町箭田の民家に到着した。この日午後3時の倉敷市の気温は35・4度。立っているだけでも汗が噴き出た。部員は小まめに休憩を取りながら作業を進めた。

担当する民家は2階まで浸水したという。「滑らんように持てよ」「ゆっくり、ゆっくり」。互いに声を掛け合い、大きな家具や家電を次々と家の外へ搬出。泥の染みこんだ畳、カーペット、布団は重たく、数人がかりでやっと運ぶことができた。床にはペンなどの文具や雑誌が散乱し、シャベルでかき集めて二輪車で運んだ。

室内はじめっとして、異臭が漂っていた。泥で覆われた床には何が落ちていても分からないためか、あちらこちらからガラスがパリンと割れる音が聞こえた。ゴム手袋をはめていても危険だと感じた。

部員の安東優さん(16)は「同じ県内でこんなふうになっていることが信じられない。今後もできることをやりたい」、山名海至さん(17)は「被害が少なかった自分たちが動いて、少しでも役に立ちたい。現地に来て、ボランティアの人数は少ないと思った。これからも参加したい」と話した。

泥の染みこんだカーペットを運び出す玉野高野球部員＝19日、倉敷市真備町箭田

この家の住人は避難中で不在だったが、17、18日に1、2年生に自宅の片付けを手伝ってもらったという近所の長谷川咲子さんが顔を見せた。「親戚が来ても人手が足りず困っていた。高校生は体力があり、チームワークで手際も良く、あっという間に片付けてくれた。本当に助かった。あいさつもよくしてくれて、元気をもらえた」と感謝していた。

倉敷市でボランティアを受け入れる同市社会福祉協議会によると、被災地では高齢者世帯を中心に片付け作業が進んでいない。協議会は「被災地が広範囲なこともあって復興作業は長期戦になる。消毒や支援物資の仕分けなど作業も多岐にわたるので、ぜひ協力してほしい」と呼び掛ける。

玉野高はサッカー部が20日、土砂崩れで空き家が倒壊した御崎で作業した。光南高は16日にハンドボール部が総社市を訪れ、25日には野球部が倉敷市で作業する。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2018年7月25日 山陽新聞朝刊 28ページ